捕獲大作戦2

インタビュー ~side 袴田圭吾~ 捕獲大作戦2

「重いだろ。 その荷物よこせ」

きゅん……

ばぐれるぞ。 ほら お前の手、 温か いな」

キュン……

- 外食もたまにはいい が、 ユリの料理が一番好きだ」

はうつ……し、 心臓がっ! どうしたらっ!

結婚して早三ヶ月 ——私、 愛しの旦那様・圭吾さんに身悶えする日々を送ってお

今日は、二人でお買い物

買い終えました。 最初に訪れたデパートでは、 **圭吾さんのご命令により何度も試着をさせられ、** やっと冬物を数点

したファーが付いていて、 可愛らしいボタンの真っ白な本革のコー 暖かくて触り心地抜群 ト は、 圭吾さんのイチオシです。 襟元と袖にフワフワと なりもと そで

と引きかねない趣味かもしれませんが、~どんな趣味でもイケメンだからOK!\* のマジックが発 圭吾さんは私を着せ替えるのが好きなんだそうです。リアル着せ替えごっこ……? 私が受け入れちゃっているのですから問題ナシです。 イケメンてー - ずるい と、 ちょっ

さんが「ちょっといいか?」と、 機種変更…… レット端末を受け取るみたいです。そしてなぜか、私と圭吾さんの携帯電話を、 その後、 私達はランチを楽しみ、 携帯ショップへ立ち寄りました。 腹ごなしをかねて繁華街の目抜き通りをブラブラ。 修理に出していた会社用のタブ スマートフォンに すると圭吾

「圭吾さんと、 お、 お揃え い

「駄目か?」

「逆ですぜ、 旦那あ! むしろありがてぇですよ!」

「……どこの町人だ」

ふおお……これなら電子書籍になった(BL)小説とか、(BL)漫画が手軽に読めるぅ! ひゃっ

だって私は腐女子……つまり、……って、すみません。つい、 取り乱してしまいました。

アニメや小説やゲーム(主にBL) が大好きなオタク女子ってこ

のも照れますが…… 圭吾さんは、 その、 丸ごと愛してくださっているのです。 ……なんて、 自分で言う

見たいものがあるので、二手に分かれて散策です。実は私、新作の大興奮している私の頭を撫でた圭吾さんは、私とまた手を繋ぎ、 です。私も働いていますので、なかなかゲームをする時間が取れない。それに家事も忙しい……な んといっても新婚ですし! だからどうせなら厳選した一作をプレイしたい訳ですよ。 実は私、新作のゲームをチェックしたかったの 今度は家電量販店 へ。それぞれ

奥様! クタイプのブレンダー。簡単に物を刻んだり泡立てたりできるから、料理の幅が広がりますぜ、 でも散々悩んだ結果、ゲームはやめて、 今回は調理器具を買うことに。選んだものは、 スティ ッソ

だけどな。 売り場をあちこち探したら、圭吾さんはなぜか洗濯機売場に。 駄目とは言わ うーん、やっぱ新機能とか付いてると、 れないだろうけど、 一応買ってもいいか、 つい見ちゃう心理ですかね? 圭吾さんに聞いてみようっ ……まだうちのは壊れていないん

「圭吾さーん。これ買ってもいいですか?」

「ああ。 なんだ、わざわざ聞いたりして」

圭吾さんは呆れたように私の手からブレンダーを取り上げて、 さっさとレジカウンターへ持って

「ユリは無駄遣いするタイプじゃないってわかってる。 家族の物ですし、 いいお値段ですから一応、 必要な物なら自由に買っていいんだぞ」 と思いまして」

さん、若干頬が緩んでおりますよ? 家族……と圭吾さんは私の言葉を繰り返した後、黙って私の頭を撫でてくれる。おやおや、

家族で使う物なので、ちゃんと相談して買いたいのです。

談する必要もなかったのですが…… 独身の頃、お金を使うのは、大体地方のオフ会とか、 同人誌の即売会ぐらいだったので、 誰に相

周囲の評判も上々。圭吾さんもお褒めの言葉をくださいます。 また最近は、オシャレの楽しさを知りました。 身だしなみっていうやつに気を遣うようになり

『今日も可愛いな、ユリ。それを脱がせるのも楽しみだ』

な感じのとんでもないセリフを浴びせられる毎日は、 なかなかに刺激的でゴザイマ

会計を済ませ、それぞれ片手に荷物を持って手を繋ぎ、二人の愛の巣へと帰る

あー……なんかすごくすご~く、幸せ。

ぴゅうっと吹く風の冷たさが、 冬の訪れを知らせる。これからどんどん冷えこんでくるんだろう まさに幸せって、こういうコトを言うんですねぇ

なあ。でも、私と圭吾さんは新婚アツアツなので寒さなんかに負けません!

幸せを噛みしめながら、私は結婚に至るまでのドタバタの日々を思い出した。

重たい髪を真ん中分けにし、かつ二つ縛りにした昭和な髪型。そして化粧っけゼロの顔。彩りが一 『今時どこで売ってるのか探すのも大変な、ガラス製の太枠黒縁眼鏡。 可哀想にすら思えるその残念な服装。 どれもこれも最初から気に食わなかったんだ。 梳り た形跡の見当たらない

カリ見られてしまったことから始まったのです。 入社してしばらく過ぎた頃 -私が描いたBL漫画を、 カチョーである圭吾さんにウッ

それで済まされる訳がない。代わりに、彼は『三つの条件』を私に突き出した。 かと思いきや、原稿を返してくれ、 をモデルにしたものでした。自分がモデルとなっているその漫画を見た圭吾さんは激怒する…… 男×男のラブストーリー『課長、深夜に愛を』は、袴田圭吾×清水博之という実在する私の男×男のラブストーリー『課長、深夜に愛を』は、袴田圭吾×清水博之という実在する私の さらにこのことを自分の胸一つに収めるとおっしゃった。 司

一つ、ダサい見た目を変えること。

二つ、一ヶ月間、 カチョーの家に住みこんで、 家事全般をすること。

とを好きになっていたのです。 てカチョーのプライベートを知り、様々な出来事を乗り越えるうちに、 あれやこれやと抵抗しましたが言いくるめられて、最終的に条件を呑むことになりました。 いつの間にかカチョーのこ

らの縁って、なんだか運命的……! 教えてくれなかったのは、 びっくりですよ! しかもそれを、私の家族が私に黙っていたことまで発覚しましてね! さらに幼い頃、 実はカチョーがお隣に住んでいたという事実を思い出しましてね! 私が自分自身で記憶を封印していたからだったのですけど。 小さい頃か いや、 家族が もう

そして三つ目がなんと――婚姻届にサインをすること。

たりなんですけどねっ そんなこんなでー まさかまさか、ですよ! 私 捕獲されてしまいました! 色々すっとばして、 いきなり結婚ですよ! でも、 す、好きだったから、 おいおい 願ったり

代わりに渡されたのは、売店にあった露出度低めなショートパンツのタンキニ…… クの三角ビキニを身に着けました! なのに圭吾さんてば、即座に「阿呆! しかも一泊二日です。まずは園内にあるプールへ。私は気合いを入れて、レースで縁取られ この夏は、 まだ圭吾さんと私が奇妙な同居生活を送っていた頃に約束した、 着替えろ!」と命令 遊園地へ行きました。

しかも大きな浮き輪を、上からボサッと。

ちょ、子供ですか? 子供扱いですか?

昼間はそんなに飛んでないけど、 非難の視線を送ると、「虫よけだ」なんて言って仏頂面を見せました。まあ夏だし、蚊もいるかな 浮き輪にそんな効果があるなんて一 一つて、 虫よけ?

びした水着を着たかったのですが……周囲の目というものを忘れておりました。 ウッカリ。 んってば可愛い おっと、 そうか! そういうことか~! こ、これは独占欲ってやつですね? やだ! すごく可愛い! そしてありがたや~。圭吾さんと一緒だから、ちょっと背伸 いやあ、 ウッカリ 圭吾さ

圭吾さんは、私の隣でちょっぴり微笑んでいます。

もう素敵すぎる! ひとつ年を取ったせい か、 端整なお顔に男の渋みが加わ って v

そしてしっかりと筋肉がついたひろーい背中。こりゃあ飛びつきたくなりますね。 の武器、を見せられなくて非常に残念です。これはもう天下一品どころではない、素晴らしいブツ お任せします) 何度、 それになかされたことか!(あえての平仮名、 どの漢字をあてるかは、ご想像に 水着の下の

それから腕の筋張ったところも、 濡れ髪が、濡れ髪がーーっ!(もはや変態な心の声) 手の甲がゴツゴツしているところも素敵! なにより、 濡れ髪

手を伸ばして、 **圭吾さんの腕をギュッと掴んで頬ずりすると、ポンポンと頭を撫でられた。** 

「可愛いな、 ユリ」

くうぅっ! 堪りませんっっ!

しておいた近くのホテルに直行し、 ほほほほら、し、 いろいろな感情が溢れ出てしまい、 新婚だし! 夕方まで部屋に篭っていたのは仕方のないことだと思います。 私は圭吾さんに コッソリ耳打ち。 プー ルから引き揚げ

から夕食を早めに取り、再び園内へ。

圭吾さんと指を絡めて手を繋ぎ、丘の上にある観覧車を目指して歩く。

花火が上がる時間だな、 に並び出した。 婚約指輪代わりに貰った腕時計が、キラキラとLEDの光を反射してきらめいている。 ほどなく順番が回ってきて、 と思って観覧車乗り場で待っていたら、カップルや家族連れが次々と後ろ 私と圭吾さんは観覧車に向かい合って座る。

圭吾さんとこの遊園地に来た日のことを思い出す。

り絞って、私は主吾さんの気持ちがわからなくて。あの時は、まだ主吾さんの気持ちがわからなくて。 でも恋人になりたくて、 なけなしの勇気を振

『夏に、また二人で来たいです』

『一緒に、花火が見たい……です』

一ヶ月の同居生活が終わっても、二人の関係を繋ぎとめるために

そして、とうとうあの時の願いが、今果たされようとしているのです。

迫るものがある。 時は夕暮れ時のオレンジ色がとても綺麗だったけれど、 ゆっくりと頂上を目指す観覧車からは、幻想的な遊園地のイルミネーションが見渡せる。 夜のイルミネーションもまた美しく、

「なにを考えている?」

ウットリとしていたら、 ふわり、と圭吾さんの手が膝に置いていた私の手に重ねられた。

「前に来た時の思い出をなぞっていました」

「前に来た時か……あの時、 俺は内心すごく焦っていた

「どうしてですか?」

「……絶対に逃がすものか、 という強い想いを抑えるのに必死だった」

来ました!

ユリの方から『また来たい、 二人で』と言われて もう一度、 惚れた。 その時ほど、

## た制約を恨んだことはなかったな」

か、とっくにキスはされておりましたけどね! 濃厚な大人のキ・スー 己に科した制約……って! 確か時がくるまで手を出さないという、アレですかっ? っていう

「もう一度、二人で一緒に来ることができて、よかった」

私は向かいの席から、黙って彼の隣にそっと移動し、 指を絡めた。

伝わる? 私の想い。

伝わる? 苦しいほどのこの胸の高鳴り。

圭吾さんの瞳に映った私。ああ、私はこんな顔をしていたのですね。 蕩けたように、 欲しがるよ

うに、圭吾さんを見つめていたんだ……

ドンッ。

大きな音と共に、 夜空で開く大輪の花。 続けざまに、 いくつもの花が咲き乱れる。

それを視界の端に映しながら、 近づいてくる圭吾さんの唇を迎えるために、 私はゆっくりと目を

こんな風に結婚直後の三ヶ月は、 瞬く間に過ぎていったのでした

更新しているのです。 家でパソコンに向かっておりました。私が所属する同人サークル『BARA☆たいむ』 お買い物デートをした翌週末。 **圭吾さんが休日出勤してしまったので、私は真っ昼間から一人、** のサイトを

2

ハーイ☆皆さん お元気ですか? ばらメイカーりりい ♪でっすー

今日は大事なお知らせがあります。

||愁堂芙妃都|| は、都合によりリーダーを退任しました。

そんなこんなで、次期リーダーは皆さまご存知の『所天狐』に決まりました! 引き継ぎなどがあるため、 サークル活動の方は少しお休みをいただきます。

次のメルマガでは、同人誌即売会のスケジュールと、新刊のご案内ができればいいなと思います。

それでは皆様、 よい夢を……

『BARA☆たいむ』→ http://www. ×××× .ne.jp

S<sub>.</sub> 私の個人サイトはこちらです。 遊びにきてくださいね☆→ http://www. ○○○○ .ne.jp

永遠に続くかと思った、サークルメンバーとの腐った語り合いの日々が思い出される。 もう結成八年目になる『BARA☆たいむ』は、このたび活動休止の運びになってしまったのだ。

婚することになったからです! どうしてこうなったかというと、サークルのリーダーが、 二十九歳にしてとうとう結

く……それなのに先日 私が圭吾さんと奇妙な同居生活をしていたつい数ヶ月前、 リーダーには全く結婚の気配すらな

『りりいたん! 結婚するの。 彼の国に行くことになったから、 リーダーを降りたい

なんていう報告がありましてね。

なくて、青天の霹靂ってやつですよ! っていうか、『彼の国』ってどこ! 相手は外国の人なのか! なんて美味しいネタ!

編纂に搬入の手続き、そしてサイトの更新ができなくなってしまった。そこで退任という運びになっ という訳でリーダーは、 みんなのスケジュール調整や、 即売会の抽選予約、 そして合同誌などの

の私では、 インテリアコーディネーターをしているメンバーは、 新たなリーダーを立てなきゃ 代わりなんて務まるはずがない。他に適任者はいないか、 いけないけど、 自分に割り振られたペ 仕事がすごく忙しそうで、 と考えてみたけれど…… ージの漫画を描 たまに『修羅場 いてい

婚して、最近子供が生まれたので、きっと子育てで大忙しだろう。ほかのメンバーに当たってみた けれど、『リーダーとなると荷が重くて……』と消極的だ。 なう』とSNSで安否がわかる程度なので、とても任せた! なんて言えない。もう一人は去年結

か収まったのだった。サークルのホームページの管理は、 とまあ、紆余曲折ありましたが、建前上の新リーダーを決め、皆で業務を分担する形でなんと 応援してくださる方もいらっしゃいますので、 私が担当になりました。一 いっちょ頑張りますよ! 抹の不安はあ

応援してくださるようになった方なので、 る方から次々にコメントが入った。ほとんどがリーダーのファンであり、そこからサークル全体を サイトのBBSには、『寂しいです』『復活をお待ちしております』など、応援してくださって リーダーがいなくなるというのはかなりの痛手です。

三作続いた『課長、深夜に愛を』シリーズがなかなか好評で、固定の読者さまがつきました。 次に私の個人サイトの方を見てみると、チラホラとコメントが入っておりました。

残念ながら圭吾さんとの約束で続編は出せませんがね。うん、 コメント欄を見ると、 いつもの方々から応援メッセージが入っていた。

非常に残念です……

れでも、ずっと応援していきます! 【シルミルク】 【パンダスメル】 私は清水押し! 課長萌えの私としては、鬼畜攻めをする彼の姿を見たい サークル活動が不定期になるということで、とても残念に思っています。 もちろんりりぃさんの新作も♪ 翻弄される彼が好き過ぎます。 そ

ようこそいらっしゃいました! ささっ、どうぞ座布団を。今お茶とお菓子お持ちしますからね~」 に、こんな優しいコメントをくださるなんて。もうなんというか恐悦至極でございまして、「あらっ、 おもてなしをしたいくらいです。 ありがてぇですよ! ほんと、 星の数ほどある創作サイトの底辺にいる私

たら、そろそろ家を出なければならない時間でした。 一件ずつ心をこめて返信し、パソコンをシャットダウン。 んーっ、と背伸びをしながら時計を見

実はこれから、 リーダーと婚約者さんを交えてランチをするのです。

れてくるのかワクワクして待っていた 待ち合わせのレストランに先に到着した私は、 出入口を気にしつつ、 リーダーがどんな相手を連

「それで、 どうだったんだ?」

れました。 夕食を取ってお風呂に入り、 いつものようにベッドの上で寝転がっていたら、 圭吾さんに尋ねら

「それが……とんでもない相手を連れてきたのですよ!」

**圭吾さんの男らしい腕に巻きついていた私は、** ガバッと身を起こして吠えた。

だって、 だって!

リーダーより二歳年下の婚約者は、 『どこの二次元から引っ張ってきたのですかっ とい

うくらい、 端整な顔立ちのいい男でした。

すけれども。 もちろん私が言う『いい男』とは、ホモホモしい創作活動のモデルとしてふさわしい、 の意味で

リーダーの婚約者は、 眼鏡をかけさせたら最強じゃあございませんこと? 灰色の髪に水色の瞳という異国風の容貌をしていた。 細身のスーツを着せ

いるらしく、彼もリーダーのBL好きはご存知とのこと。 かかった。うむ、誰が見ても、お似合いな二人です。リーダーは嫁ぎ先でも創作活動にいそしんで 私の向かいに二人が座っていたのだけど、彼のリーダーを見る眼差しは、 どこまでも優しく柔ら

結婚しても趣味は続ける……師匠っー

「りりぃたん……なんか落ち着いちゃったわねー。前はもっとガツガツしてた気がするけど。

なんかわかっちゃった! 三大欲求を満たされているから、かしら」

「三大欲求、ですか?」

「そうよ。食欲、睡眠欲、 そして性欲よ。ずいぶんと可愛がられてるのねー」

そう言って、リーダーは自分の右耳のすぐ下を、指でトントンと叩いた。

なんでしょう? キョトンとする私に、 リーダーは「付いてる」と教えてくれました。

キスマークの存在を!

ええつ? うわあああっ! なんでなんでいつの間にーっ!?

思わずパッと手で隠しましたが、 体が茹で上がるかと思うほど熱くなり、 恥ずかしすぎて消えて

しまいたくなった。

くっ、見てろよ圭吾さん。 いつかきっと……仕返ししてやり……マス。

ってなことがありました……っ 7 圭吾さん聞いてます?!」

心、狭っ!」「他の男の話なんぞ聞きたくないな」

ベッドの上で正座し、拳を握って語っていた私は、 バ ッタリと倒れ

嗚呼、圭吾さん、ふてくされておられる……-

手に堕ちるがいい』みたいなセリフを月光の下で言わせたい!」と妄想していただけなのですが…… **圭吾さん的には、私がニコニコして(実際にはニヤニヤ)、他の男性を褒め称えるのが面白くなかっ** 私はリーダーの婚約者に対して「ああ、このビジュアル で、『ふふ……もう諦めたかい?

「あのですね、前に言ったと思うのですが……三次元の男性として見てませんからね? 私は仰向けに寝ている圭吾さんの腕と脇の間に潜りこみ、ギュウッと抱きついた。 たようです。そこでハッと気づく。そういうのはちゃんと言ってくれなければ伝わらないのですよ

ネタ。 えーと、 その、 趣味の方の。 私が好きなのは、 圭吾さんです。 圭吾さんだけが私の……

私の……」

「私の?」

「リアル嫁です

名です。ちなみに大好きな二次元キャラのことは『俺の嫁』って言うんですよ。 「あああ、ごめんなさい。 圭吾さんなくしては存在し得ないんです!」 リアル嫁っていうのはつまり、 既婚者が実際の配偶者に対して使う呼び 私にとっての

「全くわからん」

「つまり圭吾さんあっての二次元萌えです。圭吾さんがいないと萌えられないんです、ダメなんです」

「ユリ?」

「じっとしててください

圭吾さんの胸に耳を寄せると、 とくん、 とくん、 と規則正し い心臓の音が聞こえる。

あったかいな。気持ちいいな。

しばらく耳を澄ましていると、圭吾さんが私の頭を優しく撫でてくれた。

こんな風に甘えられるのも、こんな風に応えてくれるのも、 想いが通じ合っているからこそ。

顔を上げ、両手で圭吾さんの頬を包むと、少しだけ髭がジョリッとする。これが唇に当たると少

し痛い。圭吾さんの唇に、 自分から顔を寄せて口づけた。

歯列に舌を這わせた。 ちゅ、ちゅ……と、軽く啄むように。 少しだけ舌を出して、 彼の唇をチロッと舐める。それから、 圭吾さんは、されるがままで、 唇をこじあけ、 私を興味深そうに眺めてい 綺麗に並んでいる

さらに奥へと舌を伸ばすと、 圭吾さんの温かな舌先と触れ合う。 誘うように、 絡めてみたり吸 5

てみたりするたび、 くちゅ、 くちゅ、 という音がした。

た男の欲棒が……! マッチョではなく、必要な筋肉が必要なだけついた体を撫でて下りていくと、そこには固く屹立し そして、 口づけをしたまま、右手をそっと圭吾さんの下腹部へ向かって伸ばしていく。ガチムチ

「もう、おっきくなってます」

嬉しいですね。 撫でるように上下に擦った。 勃ち上がった肉茎が、 私の手の中でどくどくと脈打っています。 柔らかく手で包

「おい……」

「圭吾さん、お疲れでしょうから、せめて私が\_

連日の残業に休日出勤にと、お疲れですよね。 妻は心配なのです。

「熱い……です、すっごく」

初めての夜以降、 何度も何度も何度も何度も(エンドレス)、 見たり触れたり挿れたりす

る機会があったけれど、どうも未だに慣れなくて……

手を添わせ上下に擦ると、

より固く、

それに伴い、

キスもより深くなって

下腹の奥がキュンとする。 唇をちゅうっと吸った後、 私は圭吾さんのズボンとパンツを一緒に下ろす。 より太くなっていく。 ……おおう……ご立

自分も、 ズボンとショーツを脱いで、 よいしょと圭吾さんに跨った。そして男茎を軽く握って自 派に成長あそばされて……

いた音がした。 分の蜜口に当てる。 うん、 大丈夫。とっくに自分の方は準備ができていたらしく、 にちにちと粘っ 5

「いきますよ……ふっ、……ん!」

相当な質量をもつものが、自分の膣内に入ってくるのがわかる

んに襲ってきて、 受け入れる気持ちよさ、押し広げられる苦しさ、 どうしようもなくなってしまう。 そして絶頂に向かう 期待。 それらがいっぺ

やくすべてが収まる頃、 私のナカが圭吾さんを咥え、奥へ奥へと導いていく。 私はくたりと圭吾さんの上に覆い被さっていた。 ぞくぞくとした快感が体中に広がり、 よう

「……は……あっ」

う……動けない……です……

**圭吾さんは私の背中を大きな手で撫でてくれる。** しかし次の瞬間

「やっ、ま、 待ってくださいっ! 動かない ・でっ」

「どうして?」

「ふぁつ……う、 動かれると……ダメなんです……」

駄目とは?」

「とにかく……今は、 待って……んんっ!

ダメと言ったのに、 なぜ動くのですかっっ

圭吾さんは、 私のパジャマの裾から大きな手を入れて、 両胸をすっぽりと包み、 揉みしだいた。

優しく、時に強く、 強弱をつけて。

「あ、あうっ……ん、やめ、て……っ」

胸の先端が下着に擦れてピンと尖っていく。 敏感さが増していく。 ぁ ŧ

限界と思った瞬間、尖った先を両方キュッとつまみ上げられて、 とうとう達してしまった。

目の前が真っ白になり、体がビクンビクンと痙攣を起こす。

あっ、あ……ん、 もう……だから、 ダメって言ったんです……」

ふにゃっと力が抜ける。

「もうイッたのか。早いな」

「ミコスリ以下ですみませんねっ!

こんな体にしたのは誰よ、と思わず責任転嫁してしまう。だって、だってーっ「ミコスリ以下ですみませんねっ!」圭吾さんが悪いんです!」

ようやく力が入るようになった上体を起こし、圭吾さんの胸に手をつきながら言う。

でくださいね! ……っしょっと」 「いや、でもでも今日は、 圭吾さんに楽をしていただこうかと思ったのですよ! だから動かな

伝わってくる気がします。

ゆるゆると腰を上下に動かした。

うう、

なんだか快感が、

一度イッたせいか、

よりダイレクトに

「んっ、く……」

「今日は『私が』、なのです」

よっ! らに私の羞恥心を煽った。あまりの恥ずかしさに顔を伏せたくなるけれど、一度達したせいか、恥ずかしいほどぐっちょぐちょに粘液が溢れている。 最後までヤリきります そこから発する音がさ

敏感な秘芯が圭吾さんに当たり、 ビクッと腰が震える。

「ふあっ、 .....んんっ.....」

**圭吾さんを気持ちよくさせたい** ! その一心で腰を動かすけれど、自分の快楽が勝ってしまう。

自分の 、よりよいところ、へ、知らず知らずのうちに腰の位置を調整する。

黙って集中いたします! ものです。 ゾクリと快感が走る。こんな時にも、 陰茎先端部の張りだした部分、つまりカリクビというものが私のナカを引っ掻くたびに、背筋に しかしそれを口に出そうものなら、 BL小説で学んだ名称が、思い浮かんでしまうから困った 凍てつく視線を向けられることはわかっているので

えて必死で動いていたのに、 「ひゃうつ! 拙いながらも、 け、 頑張って、頑張って……。快感で崩れ落ちてしまいそうになるのを、 けいご……さんっ! 圭吾さんは急に両手で私の腰をガッと掴んで、 なんで止めるんですか!」 動きを封じた。

息を荒らげられて、そのうえ潤んだ瞳で見られてみろ!

わかってまひゅ っ あああでも男女関係における男の気持ちの揺らぎは、 確かに理解でき かっていない

25

お前は男というものをわ

いないかもしれま……せつ、 んつ、 んつ、んんんんつ!!」

圭吾さんは見事な腹筋を使ってガバッと体を起こし、私を下からガンガンと突き上げる。

「あああっ! あ、あ、ああああんっ!!」

上半身のパジャマを荒々しく脱がされ、私はあっという間に全裸になってしまった。

プルする自分の胸が、とてもイヤラシイです!

「待って! 待って、くださいっ! じゃないと、 <del>う</del>!

「俺が待つとでも?」

必死にお願いする私に向かって、ニヤリと黒い笑みを浮かべる圭吾さん。怖い 5 そ

笑い方一つで、この先どういうことになるかが予想できてしまいます!

これはマズいです! なにがマズいって……

とした感触が口腔内に一気に入りこみ、暴れまわった。舌を絡めとられ、時折息を継げるように唇 圭吾さんは私の腰と後頭部を押さえ、逃れられないようにしてから顔を寄せる。そして、ざらっ

を離してくれるが、 呼吸すらも奪う勢いだ。おまけに私のナカには圭吾さんが収まったまま。

「……うん! けい、ご……さん、んぁっ」

酸素を求めて喘いだけれど、圭吾さんの攻撃が緩むことはなかった。

今度は前に回ってきたかと思うと、 私の敏感な粒をきゅうっとつまんだ。

「ふあっ、 ああああっ!!」

再び痺れるような快感が突き抜けて、 自分でも驚くほど早くイッてしまいました。

ませんよ!

おのれ圭吾さんめーっ!

圭吾さんは、力が抜けてくたっとした私を抱きしめてくれた。

力が入らないのに、私のナカはビクンビクンと収縮を繰り返している。 それがどうもケイゴサン

をしめつけているらしく、頭の上の方からクスクスと笑い声が聞こえた。

「もっと、 か? ユリはおねだり上手だな」

「ち、違いますっ!あああ、 もう、なんでですか? せっかく圭吾さんに負担をかけないよう頑

張っていたのに! これじゃ、 私ばっかり気持ちがよくて……申し訳ないです」

「俺もだ」

「へっ」

「俺も気持ちがい いし、ユリの善がる姿を見るのは、 なかなかくるものがある。 だから気にするな\_

よが……よがるって! 改めて言われると無性に恥ずかしい

火照った頬を見られるのが嫌で圭吾さんにぎゅうっと抱きついたら、 ふわっと背中にシー ・ツが触

れた。

「ふおつ?

「だが、もっと乱れさせたい。 俺の手ずから、 な

**圭吾さんは私を仰向けに転がし、** 両脚を自分の肩にかけた。 お尻が高く上がり、 より深く男茎が

ねじこまれる。

「や、だめ、だめだめっ!」

抜けそうになるほどギリギリまでゆっくりと腰を引き、 ズン、 と一気に奥まで貫く。

゙゚きゃ……っん!」

ある一点で私の内壁が小さく震えた。圭吾さんはそこに狙いをつけて、 強く、弱く、深く、浅く、変化をつけながら腰を大きくグラインドさせた抽送が繰り返されるうちに 小刻みに擦り上げてきた。

「ひぅ……んっ、 んつ……ああっ、そこ、 だ、め! やつ、やあぁっ!」

さんは気づいたようで、ふっと微笑んで頬にキスを落とした。 圭吾さんを包む私のナカが痙攣し始める。私が快感のその先へと行こうとしていることに、

「苛めるのはこの位にしておこう」

「いっ、苛めるって……ぅんっ……じ、自覚あるんですねっ!」

にしたかったのに、 圭吾さんは私の反応を見ながら、あの手この手で攻めてくる。 結局自分が気持ちよくさせられてしまい、 あっさりと白旗を上げた。 今回こそ私が襲って好き放題……

を絡める。くちゅ、くちゅ、と互いの粘膜を擦り合わせた。 **圭吾さんは肩から私の脚を下ろしてから、体を密着させた。そして何度か唇を合わせてから、** 

の最中も圭吾さん自身が私の中を貫く音と、 あっ、あっ……だ、 も……もうつ……! 圭吾、 溢れた分泌液の音が耳に飛びこんでくる。 さんっ!」

「……っ、ユリ!」

ていた。 げた次の瞬間、 熱と呼吸と気持ちが上昇し、針の穴のような小さな出口へと向かう。 と繰り返し放出され、 内部が痙攣した。それと同時に、激しく突き立てられていた肉茎が、最奥で爆ぜる。 私の内壁はそれを吸いこむように、 きゅうっと収縮を繰り返し 声にならない叫び声を上

肌が触れあい、心が重なり、すべて満たされた気がします……

時にゴールした達成感というか連帯感が、 つですよ。 呼吸が整うまでの間、 ずっと圭吾さんと密着している。 全身に広がる。 まあその、これぞ夫婦の共同作業ってや これはもう "いつもの" 後戯です

げる。ええ、私ね、なんというかね、その、あの、力がね、入らなくて……これも゛いつもの゛行 もこうして運んでもらってたと思いますけどね。 為なのです。それに、ま、私が立ち上がると、トロッと零れてきちゃうから、 私の頬に軽くキスをして体を起こした圭吾さんは、 「風呂行くぞ」と私をお姫様抱っこで持ち上 自力で歩けたとして

「しっかり締めとけよ」

「アイアイサー!」

「……そのかけ声はどうかと思うぞ」

が始まっちゃったり……。 その後のお風呂場での出来事なんですけれど、まあ割愛ということで。なぜなら……第二ラウン ナカをキュッと意識して締めていれば、 お風呂場に大きな鏡があるんですけどね、 溢れないことを発見したのですよ! それを正面にしながら「こ わーお! 合理的♪

レでアレが……(自主規制) こから出てくるのはなんだ?」なんつってさ、言わせようとしたり、 見せようとしたり、 アレなア

思い返すと乾いた笑いしか出てこないんですけどね。 そんなこんなで、 イチャイチャラブラブな休日は過ぎていったのでした。 圭吾さんて……超…… 工 口

3

おはようございます。 今日も元気に腰が痛いです。

滞在する予定だ。 幌支社勤務の新人の研修は、 幌支社は現在、本社や各支社の上役の方々が出向し、経営基盤を整えているところ。そのため、 二名の社員が新人研修にやってくる。二人は今度立ち上げる札幌支社で働く予定の新入社員だ。 営業部の男性が一名と、 週明 私は少しの寂しさと期待を胸に会社へと向かっております。 総務部の女性が一名。 私達が働いている本社や各支社が持ち回りで引き受けることになった。 営業の方は二ヶ月、 総務の方は一ヶ月、こちらに 今日は北海道から

その後、一ヶ月は札幌に滞在する。 今回の新支社設立事業の中心メンバ になった圭吾さんは、 一ヶ月こちらで二人の面倒を見て

一ヶ月間も別々に過ごすのか……

います。 圭吾さんは研修の準備があるため、 朝早くに出かけていきました。 なので今日は一人で出社して

寂しくて仕方がありません。独身の頃、少しでも空いた時間があれば『ガッツリ漫画読んじゃうゼ! 、ームでウハウハ〜! ひゃっほい!』なんて喜んでましたけどね。 もともと圭吾さんは出張が多かったのですが、 一ヶ月ものあいだ、 離れるなんてことは初めてで、

本当は妻としてどーんと構え、 「あなた、 いってらっしゃい」と余裕をもって送り出したい もの

でもでも、 やっぱ寂しいから、 メールも電話もいっぱいしちゃおっとー

「おはようございます!」

ほとんど人はいません。 会社に到着した私は、 元気よく呼びかけました。 就業開始には時間があるため、 フロアにはまだ

さてさて、 いつもの準備を始めましょーか

イッチオン。 まずは給湯室でコーヒーマシンにペーパーフィルターとコーヒー の粉をセットし、 水を入れてス

コーヒーがタンク一杯になる。 その間にヤカンでお湯を沸かす。それからシンクを台拭きで拭いたりと掃除をしているうちに、 たらこれも保温ポットへ。そしてもう一回お湯を沸かします。 それを保温ポットに移して、 もう一杯準備をする。 ヤカンのお湯が

パソコンでメールチェックをする。ホワイトボードに伝達事項などを書きこみ、 いた仕事の資料をそれぞれのデスクに置いていく。 保温ポットは四つあって、二つはコーヒー、二つはお湯専用なのだ。これらを満タンにし終えた フロアに戻ってFAXを回収。宛先を確認してそれぞれの机に届け、それが終わったら自分の あとは作成してお

そうこうしている間に、 続々と社員が出勤してきた。

「おはよーございます!」

な朝の慌ただしい雰囲気が、 営業部の人は、 それぞれホワイトボードに予定を書きこんだり、 私は結構好きだったりするのです。 メールチェックを始める。

「ユリ子ちゃん、 おはよ」

「おはようございまっす!」

私にファイルを手渡しながら挨拶をするのは、 マメ橋センパイ。

"マメな高橋" からマメ橋という愛称で親しまれている。

くね。あとこれお土産。 学の後輩なんだけどさ。 奴はまだ入社して間もないのに、 奴はまだ入社して間もないのに、前の研修先ですでに契約を取ってきてる有望株……ま、おれの大「そうそう。後で袴田課長が朝礼で紹介すると思うけど、今日から二人、研修に来るから。営業の お茶の時に配ってくれない?おれ、今日は外回りなんだ」 もう一人は可愛い女の子だよ。 二人ともユリちゃんと同い年だからよろし

マメ橋センパイは一見、三枚目キャラだと思われがちだけど……黙ってると実はカッコイイので

たのです。 すよ! 『課長、 深夜に愛を』 の脇キャラとして出演させるために、 よくよく観察していて気づい

「うわぁ、 温泉まんじゅう! 私 ここの好きなんですよ。旅行に行かれたんですか?」

「そうそう、 一泊二日でね。部屋に掛け流し風呂がついてたんだ」

「……彼女としっぽり……デスネ……」

思わずゴクリと喉が鳴る。

子です。 彼女というのは、マメ橋センパイと同期の渡辺おねーさまという人。ええ、 私が憧れるステキ女

の旅行はしばらく会えない分の埋め合わせってやつだよ」 ら落ち着くと思うし、それまでの辛抱だね。おれも課長と入れ代わりで札幌へ出張に行くし、 「袴田課長こそ、 ユリ子ちゃんとどっか出かけたいと思うけど? ま、 今は忙しいけど年が明けた 今回

いです。 田』を名乗っています。 袴田 **圭吾さんは、結婚を機にウチに養子に入り、『滝浪』姓に変わったけれど、仕事では『袴** 私 袴田って苗字が好きなので、 袴田カチョーってまだ呼べることが嬉し

に予定を書きつけて、 マメ橋センパイは、 さっさと会社を出ていってしまった。 「じゃーよろしく」とお土産の箱を手渡し、 キュキュキュとホワイトボ j K

私は受け取った温泉まんじゅうを給湯室の戸棚にしまいに行く。 ここへ一つにまとめておいて、 お茶の時間に配るのだ。 上司や同僚がおやつを買ってき

管理も私の役目だ。 つ端の私は、 ここの給湯室の管理人となっている。 来客時にお茶出しするのも、 お菓子の在庫

手に持ったファイルを自分の机に置い その時フロアの方から、 圭吾さんの声が聞こえた。 たところだった。 給湯室からひょいと顔を出すと、

うふふふふ……今日も最高にカッチョイイですねー。

仕事中の姿を見られるのは、 同じ職場ならではの特権だと思います。

ス・ウ・ツ!

見るスーツは、また一味違うのですよぉぉっ 圭吾さんのスーツ姿から目が離せません これだけで、 ご飯三杯いけますね。 ! ! 自宅でも毎日毎日見ているのですけどね あんなにもスーツが似合うメンズがいるでしょう 職場で

て結んだことないんですよねー。 かったものですからねえ……。 圭吾さんは手とり足とり、 実はネクタイは毎日私が選んでいるんです。 なかなか難 しいものですよ。 私ってば、そのような できれば私に締め "ふぁっしょん業界: たまにプレ て欲 イ しいそうですが、 ? で私に教えてくれま にはとんとご縁がな ネク タイ つ

そういえば スー Ÿ に 11 ア 71 ア しすぎて、 つ V お願い したことがあります。

眼鏡は 眼鏡はかけぬのですかっ!』

『必要ない』

『より完璧なビジュアルとなるのです……ダメですか?』

『駄目。大体俺は目が悪くない』

『老眼になった時のための予行練習としてひとつ』

『なにがひとつだ。阿呆が!』

アッサリ拒否されたワケですが

さんの補佐のお仕事もあるのですよっ 圭吾さんのスーツ姿を堪能していたら、 おっと、 もうこんな時間 ! 私には雑務の他に圭吾

じぃ……じゃなくて杉村さんです」 「カチョー! おはようございます。 本日 1の午後、 来客があります。 い らっ しゃるの は か 源が

とはなんだ」

いやだ』とおっしゃるので……つい……」 「あわわ、取引先の社長の杉村源三さんのことですっ! えーと、その、『源じぃと呼んでくれ なきゃ

ですよ。遠くに住むお孫さん(※八歳)に私がそっ ていました。私……二十三歳ですが。 源じぃのところに圭吾さんと一緒に訪ねると、 くりで、つい可愛がりたくなるんだ、とおっ いつも私にお菓子やらなにやら持たせてくれるの Ā

「あちらがどうしても、 というなら仕方がない。 が、 くれぐれも他所で口を滑らせないよう気をつ

けろ」

つ

カチョー

公私を区別するため、会社ではちゃんとカチョーと呼ぶのです。 社会人ですからね、この位ビシッ

と決めますよっ!

なにか連絡は?

が届いていますが……いかがなさいますか」 「時にカチョー。 先日商品を納品した店舗で、 十周年記念のパーティ ーが行われるらしく、

「そうか、 では、 出席で返事を出しておいてくれ

「はい」

「滝浪さんにも同行してもらうから、 そのつもりで

「ふぁつ……あ、 はいっ!」

ての清浄な空気は圭吾さんの周りにあるのです。 それに出席している若い男性に食べ物やら飲み物やら勧められたり、ついでに外の風に当たらな よくお会いするお客様とは多少はお話ししたりはしますが、お役に立てているかどうかなんて…… があるのです。まあ私は圭吾さんの後ろでニコニコしながら、 したおセレブな方達が笑顔で談笑……。私、場違いじゃね? と思いつつも、何度か出席したこと パーティーって苦手なんですよね なんて誘わ れたりするのも、 ちょっと苦手です。 ĺ ドレ スコードなんてのがあったり、芸能人とか、キラキラ 本当にメンドクサイですが、 そんなの適当に自分で食べるし、 名刺の管理をするくらいですけども。 お仕事だから頑張り 私にとっ

ちぃ方のね。圭吾さんは不思議なお方です。 なの に、パーティーから家に帰ると、決まって圭吾さんにお仕置きされるんですよ……ええ、えっ

「全員出社したか? 朝礼始めるぞ」

れを確認し、圭吾さんは口を開く。 任されているのだ。用事でいない人を除き、 圭吾さんが声をかける。 部長は普段から世界中を飛び回っているので、圭吾さんが部長の仕事を 部署の全員が圭吾さんの前へ集まった。 いつもの顔ぶ

で終日不在、高橋は……外回りか」 「みんなおはよう。 今日は 清水は午前中に打ち合わせが入っているな? 渡辺はセミナー -参加

う言い残してフロアを出ていき、 ホワイトボードに書きこまれたそれぞれの予定を確認。 研修に来た二人を連れて戻ってきた。 その後、 圭吾さんは全員に待 ってい

私が来月から行く予定だが、留守の間の私の仕事は清水が代行するのでそのつもりで。 いているが、 こにいる二名は北海道で現地採用した新卒だが、半年間の研修を終えてきている。それぞれ力はつ 本社をはじめとする既存の各支社から、 「前から伝えていた通り、 皆でサポートしてやってくれ。では自己紹介を順に」 年明けには札幌支社立ち上げだ。現地採用した社員が育つまで、 一ヶ月ごとに誰かしら長期出張してサポートする。 それ ウチの いからこ まずは

「初めまして。新井田海斗と申します。函館出身の二圭吾さんに促され、前に一歩進み出たのは若い男性 には自信があります。 それと、 アニメとゲームが好きです。 函館出身の二十三歳です。 ずっとサッカーをやっていたの 今はアーケード ゲ 込に ハマ つ

休日に友達と遊びに行っています。 えーと、すいません、オタクです!」

カー一筋だったらしく、 爽やかに笑顔を見せる新井田君に、どっと笑いが起きる。小学生の頃から大学のサークルまでサッ 高身長、 引きしまった体躯、よく日に焼けた肌に白い歯……むむっ、

## 俺になんか用?」

が練習している。 しまうのだ。そして、その中でも彼から目が離せない。 くなってしまった。そのことに納得はしているけれど、 僕はいつも生徒会室からグラウンドを眺めていた。キラキラと降り注ぐ太陽の下で、 僕は中学生の頃までサッカーをやっていたけど、膝を壊し、激しい運動ができな 時折、ついついサッカー部の様子を眺めて サッ

と気づくまでそう時間はかからなかった。

そんなある日、こっそり見ているのが彼に気づかれてしまう。

僕をまっすぐ見つめながら尋ねてくる。 僕はその刺すような視線にゾクゾクし

なオタクなんて認めませんよ! それにしても、 人目が無かったら絶対にグーパンチ飛んでましたね! いやいや、なにやら鋭い視線を感じてハッと顔を上げると……いやぁぁぁっ! なんだこの新井田という男は。 、オタク、 ですと? あっぶねー ノンノン! 圭吾さんが睨んでるう う !

もうリア充くさい。 だいたいアーケードゲームを友達と、ですって? それなんてゲームなのさ。友達と、 ってのが

私が腐女子であるのはトップシークレットなので、口を噤みます。 同じオタクとして彼の爽やかさが癇に障り、よっぽど戦いを挑もうかと思いましたが、

漫画のアイドル゛そのものでした! するのは初めてなので、仕事はもちろん生活面のことも色々教えてください。よろしくお願いします」 一笹森香織です。 新井田君の隣で、ほっぺたを真っ赤に染めてペコッとお辞儀をした彼女は、 私がそんなことを考えているうちに、もう一人の女性の自己紹介が始まりました。 二十二歳……あっ、早生まれなので新井田君と同じ学年です。 一言でいえば 内地に長い

ちゃったり、膝を擦りむいた男子に「痛い?」なんて消毒しながら上目遣いしちゃったり…… なることを祈る。 うわああこいつかわえええええっ! 運動部なんかでマネージャーをしていて、練習終わりにはレモンのハチミツ漬けを差し入れ 独身男性達が、 私は、 おおっと色めき立つ。 傍観者として楽しませていただこうと思います。 と叫びたくなるような、 これは愉快な争奪戦が始まるかもしれません。 いわゆるオンナノコ。 いいネタに

新井田君は二ヶ月、 エルダー制度では、 実務も職場環境についても相談しやすいので、 先輩社員がいつも傍に付き、 笹森さんは一ヶ月、エルダー制度でその期間を過ごす。 新入社員が馴染みやすいのが利点です。 マンツーマンで指導したり面倒を見たりするの

新井田君にはマメ橋センパイ、 笹森さんには渡辺センパイが付くことになっている。

ですが、 のっけからタイミングが悪いですね…… マメ橋センパイはただ今外回り中で、 渡辺センパイも一泊二日でセミナーへ参加してい

ころもあるだろうし、私にお任せくださーい! 支社で研修済だから、仕事そのものに関しては問題ないだろうけれど、 今日のところは同じ年齢ということで、 私が社内のことなどを教えることになっ あちらとでは勝手が違うと 7 い すでに

圭吾さんから二人を引き渡されて、私も自己紹介をした。

らないかもしれないけど、よろしくね」 「滝浪ユリ子二十三歳、お二人と同い年なの。私も四月に入社したばかりなので、 あまり頼 ŋ にな

背が高い方なので、 挨拶しつつ、二人を見上げる。新井田は私と比べて頭 一五二センチの私にはやや首が痛くなる一日になりそうです。 一つ以上大きく、 笹森さんも女子にしては

「えーと、 滝浪さん、お世話になります」

「はーい。じゃあ、 さっそく、 社内の案内から始めますね」

後ろに二人を従えて、それぞれの部署やトイレの場所、 資料室や会議室などを回る。

新井田君は初対面の私にもどんどん話しかけてくる。 さっすが営業部、 期待の新人なだけありま

言がちょいちょい出る。 あれこれと話しているうちに、 聞けば、「ああ、俺は函館の田舎に実家があって、ばーちゃん子だったから」 ん ? と気づいた。笹森さんはそうでもないけど、 新井田君は方

と爽やかな笑顔で答えた。

頬をピンクに染めながら言った。うおお、 笹森さんは?と尋ねると、訛らないように練習したけれど、 可愛いなあ ふとした時に出ちゃうんです、 ح

いる。 案内中、 それから電話を受けた時の対応、書類や事務用品のしまってある棚などを説明して回ってい いつの間にか昼休みになってしまった。 新井田君は気になることをあれこれ私に質問し、笹森さんは手帳にサラサラとメモって

んだよね。二人にはどうしてもらおうかと考えていると、 大体は外へ食事に行ったり、お弁当を買ってきたりするけれど、今日は私、 マメ橋センパイが戻ってきた。 お弁当を作ってきた

「ただいまー」

「あ、 お疲れ様です! そうだ、 新井田君、笹森さん、こちらがマメは じゃなかった、

ンパイです。新井田君にこれから付いてくれるセンパイですよ」

「お久しぶりです先輩! その節はありがとうございました」

マメ橋センパイに向かって爽やかな笑顔を向ける新井田君。

「えーと、マメ橋センパイの後輩でしたよね?」

就職活動中に大学のOB会があって、 そこで初めて高橋先輩と会ったんだ」

の会社にナンパしたのさ」 「教授からさ、おれとタイプが似てるし、 営業向きだからって新井田を紹介されてね。だからうち

大学の先輩後輩、 男二人で笑いあう姿……おぉ……新たなネタ発見ですよ。

マメ橋センパイと似てるかも。 そう言われてみれば、 確かに新井田君は人好きのする笑顔や、 コミュニケーション能力の高さが

ひとしきり雑談していると、 マメ橋センパ イが「あっ」 腕時計を見た。

「やべ、もう昼過ぎてるのな。三人ともこれ からお昼?

と思いまして……」 「そうなんですよ。私、 お弁当持ってきちゃったので、新井田君と笹森さんのお昼、 どうしようか

「じゃあ、 おれもまだだし、二人を連れて昼行ってくるわ」

気を遣ってくれたのだ。 昼食はたいてい私と圭吾さんがお弁当を一緒に食べる、 というのを知っているマメ橋センパ イは

ラキラと差していて、まるで後光のようです。 振り返ると、圭吾さんはちょうど電話中だった。 いってらっ 通話している……うう、我が旦那様ながら超かっこいいですね! しゃーい!と送りだして、 私は自分の席に戻り、 カタカタとキーボードを叩きながらモニターを見 お弁当を取 背後の窓から太陽の光がキ り出す。 大事に 抱えて

とはまさにこのこと、 しまった表情で仕事の話をしている声! その声で甘い言葉を吐かれてごらんなさいよ! 受話器を持つ手……真剣なお顔……ブルブル震えちゃうほど素敵です! という体験ができますぜ! それからキリッと引き 腰砕け

もまあ妄想するのは禁止されていないので、 以前ならばこの萌えを漫画にすべてつぎこんだものですが、 電話が終わるまで存分に楽しませていただきますぜ、 禁止令がでているもので……それで

旦那!

ゴスッ。

「ぎゃっ!」

場所を考えろ、 場所を」

「ちょ、早っ! 目の前に星が飛びましたよ! いつの間に電話終わったんですかっ! うおぉぉぉ、痛い V V い っていうか、そこファイル V の角 角!\_

危うくお弁当箱を落とすところでした!!

圭吾さんは私の鼻をキュッとつまみ、小さくため息を吐い

「ユリ。 今フロアに誰もいないからよかったが、 その妄想中にだらしなくなる顔はどうにかならん

のかし

¬ ^!? ほー ひはっへ (どうにかって)?」

「封印しろ」

へっ?だらしない表情をした覚えはないんですけどねー?

「無自覚め。 いいか、 そういう素の顔は俺だけのものだ。 少しは慎め

「は……は、 いい……?」

を大きな手でポンポンと撫でた。 無自覚? 素の顔? 私は訳がわからずキョト ンとする。 すると、圭吾さんは顔を緩め、 私の頭

「まあいい、 それがユリだからな。 腹減ったし、 行くぞ」

「あっ……は、 はいっ!」

使う小さな会議室へ足を向ける。 私が抱えていた二人分のお弁当箱を圭吾さんはひょいと持ち、 いつも一緒にお弁当を食べる時に

いかけていった。 私は火照るほっぺたをペチペチと叩きながら、 「待ってくださいーっ!」と圭吾さんの背中を追

午後になると、 マメ橋センパイは新井田君を連れて再び外回りへ出た。

他の支社で研修済なので、 同じレベルだと思う。 一方、渡辺センパイは終日不在なので、 実際のところ、 業務に関して教えることはあまりない。というか、 笹森さんは私と一緒に事務処理を始めることに。すでに

までですが。 私は十六時からの源じい……じゃなかった、ゲンゾウ工房との打ち合わせに同席するので、 それ

笹森さんは、もう大体のことはオッケーだよね?」

いっつーのに、お行儀よく膝小僧をきちんと合わせて座っている姿はますます可愛らしい チラッと見ながらムラムラしている私に、笹森さんは桜色の唇を開けて答えた。 隣の席に座った笹森さんのほうを向いて問いかける。すらりと伸びた脚ってだけでもポイント高

「はい、おそらく滝浪さんよりできると思います」

「でもこちらの会社では初めてなので、渡辺先輩がいらっしゃるまではよろしくお願いします」

んんつ?

なにか言葉に棘を感じましたが、気のせいでしょうか……

あ、あはは……と曖昧に笑っていると、電話が鳴った。おっと、二コール内で取りますよ つ

私が手を伸ばそうとしたその矢先、笹森さんの手が受話器を取り上げた。

「はい、お電話ありがとうございます。

ハキハキと、聞き取りやすい声で話す笹森さんは、すでに歴戦の勇者並でした……

者にサッサと電話を繋いだ。受話器を下ろした彼女を、ぽかんと眺めていたら、ふっと鼻で笑われた。 電話は取引先からの問い合わせだったようだけれど、笹森さんは一言も私に尋ねず、 営業の担当

「え……ていうか、取引先とか担当とか、まだ教えてなかったような……」

「一応、ここでの先輩ですよね? しっかりしてください」

「午前中見せていただいた資料で、大体掴んでますから。基本中の基本です」

う、ううっ、笹森さんてハッキリ言う人だな……怖いっ。

……ムムム……なんだか一筋縄ではいかなそうな予感……

てアレですか? 書類作成時も私に見せることなく提出(内容は合ってる)、 同い年ということもあって、もっとフレンドリーに付き合えるかなと思いましたが、 私のオタク臭が漏れていて、警戒させてしまっているのでしょうか? ひょっとし

来客時の対応(言うことなし)、デー

45

(私の半分の時間で終了)

なんだよぉぉっ

**「滝浪さん、ゲンゾウ工房の過去のデータ出してもらえる?」** 

圭吾さんが私の机の傍らにやってきて、そう言った。

あっ……はいっ!」

打ち合わせの準備をしなきゃ いけなかった

慌ててパソコンを操作していたら、横から「この資料で合ってますか?」と冊子が差し出された。

「……これは笹森さんが?」

「過去のデータと、それに関係する資料をいくつかまとめてあります……や、やだ! すみません

出過ぎたマネをしてしまいまして……」

私をちらっと見ながら、 頬をピンクに染める笹森さん

ちょ、 その態度……ナニ!?

「いや、助かる。 6す。ウフフッ、憧れの袴田課長に褒めていただいて、とても嬉しいです-なかなかよくできているじゃないか。今日さっそく使わせてもらおう」

「ありがとうございます。 とても嬉しいです」

「憧れ……? それは光栄だな」

「以前より噂に聞いておりまして……課長のお役に少しでも立てるよう色々勉強してきましたから。

北海道でも一ヶ月ご一緒させていただくので、 よろしくお願いします」

「ああ。期待してるよ」

おぉぉ……ピンク色のオーラが見えますよ! なんだ、 この華やかさは

こ、これが女子力というものか……っ!

に戻った。 圭吾さんが資料を持って応接ブースに向かったのを見届けると、 笹森さんは黙ってパソコン操作

「笹森さん、けい……ゴホン、袴田カチョーの噂ってどんな内容なの?」

すると笹森さんは、 モニターから視線を外すことなく、面倒くさそうに口を開いた。

「あんなにできる人、 なかなかいないわよ。 研修先でも評判は散々聞いたわ。 誰も思いつかないよ

うな素晴しい改革をするって」

そうですよ、ええ、そうでしょうとも! 圭吾さんはすごいお方なのです。

「人にも厳しいけれど、自分に対してはさらに厳しい。 それに部下を育てるのも上手だって、 課長

と一緒に仕事をした人が口を揃えて言うわ」

眼できるのです。 それはもうよくわかります。ちょっとしたアドバイスで、ああこういうことかーって開 圭吾さんの部下として置いていただいたおかげで、 我ながらとても成長したと思

いますよ。 まぁ……笹森さんを見ていると、その自信が消え失せますけど。

れていたけど、実際は全く遊んでいる様子がなかったのよね。それとなく聞くと『心に決めた人が いる』なんて王子様みたいなセリフを、なんのためらいもなく言ってのけたりするらしいの 「おまけにあのビジュアルでしょ? 全国に彼女がいるとか、入れ喰いとか、ずいぶんなこと言 わ

現地妻! 入れ喰い!

いや、確かに私も入社当時は、そのようなことを思わないでもなかった。 わあああっっ! だってほんとに高スペ vy

クでステキな人なのに、 からね。 彼女もいない独身男性なんて(バツイチですけども)、 とっても希少です

ができあがったのです。 男のメイクドラマ きっと遊んでるでしょー 伝えてはならない秘めたる想いを胸に、 -っていう方向に妄想が働いてしまい、全三作ともなった『課長、深夜に愛を』 ね などと思わせといて、 日々業務をこなす……そう、 実はその相手は男の部下。 決して知られ それは男×

視線すらこちらに向けずに話していた笹森さんは、急にダン、と机を拳で叩いた。 っていうか、 笹森さん、 口調がずいぶん砕けて……ま、 まあいいですけど。

「それが、よ? 急に結婚したっていうじゃないの! 私が入社した時は独身だって聞いていたの

なんで……!」

「え……ええ?」

「バツイチってのは知っているけど、 それ以降はフリーだったはずよ? 色々探りを入れていたけ

そんな気配全くなかったのに!」

怒りがキーボードへ向かったのか、 ダダダダダダダダッと恐ろしい速さでデータが入力されて

その様子を傍から見ていた私は慄きました。ま、 まさか……

笹森さんはギシッと背もたれに体を預け、 ゆっくりと私を見た。

「……ねえ、 滝浪さん、 袴田課長のお相手って知ってる?」

「ひっ……!」

知らない……んですか? そしてそして、えーっと、つまり、笹森さんてば、圭吾さんのことが……? 私の混乱をよそに、笹森さんはじーっと私の目を見て言った。 ちょ、ちょ、ちょっと! えええ? ひょっとして..... "袴田課長: と結婚したが私に のこと、

「袴田課長と結婚した相手よ。あなた、課長の補佐をしてるんでしょ? ほら、 同い年のよしみで

教えて。 ねっ?」

「し、し……知って、どうするんですかっ!

動揺する私に、 笹森さんはにっこりと答える。

「奪うのよ」

「えつ」

それはこっちのこと。で、 ざわざここにやってきたのは、袴田課長がいるからだもの。袴田課長の……ううん、 「私ね、障害があった方が燃えるの。だいたい、私が今回の出張研修に立候補して、 どうなの? あんなにもできる人の妻だから手強そうだけど……」 まあいいわ。 北海道からわ

「おおおおおおおくさまについてですがっ……!」

いえ、むしろチョロいかと思います……じゃなくて-

ユリちゃん納品書できた?」

私達のところへやってきた。 自ら名乗り出ようとしたところで清水係長 この秋から係長に就いた

が

椅子ごとひっくり返ってしまった。 心臓が恐ろしい速さでリズムを刻んでいたところに、 急に話しかけられた私は 「うぎゃっ!」 と

「きゃあっ! 滝浪さん!」

「ううう……痛い……はっ! し、失礼しましたっ!」 ガターン、と盛大に転がったため、フロア中の視線が私にク・ギ・ヅ・ケ☆ -ってそうじゃない!

ヨチヨチと這い上がり、 こちらを見ているフロアの人々へ向かってペコペコと頭を下げた。

お恥ずかしい。

圭吾さんは電話中だったけど、こっちを見ながら口を動かし『阿呆』と……

そ、 そうですよね。仕事中は私に対して、 圭吾さんはあくまでも一社員として接するのです。

「滝浪さん、大丈夫ですか? 痛むところ、ありませんか?」

てくれたり……しかし私は知ってしまったのだ……これは、演技であると! 先ほどまでと打って変わって、笹森さんはいかにも、同僚を心配する優しい女、へと変身してい おおお、す、 すごい女優っぷり! 倒れた椅子を起こしたり、乱れた私の服をポンポンと叩

「優しいね、笹森さん。それにすっかり滝浪さんと打ち解けたようで安心したよ。 渡辺さんが戻る

よろしく頼むね」

「あっ、あの

色々勉強させてください、 滝浪さん。 誰にでもできる簡単なお仕事、 ですけどね」

気が一変する。 花が綻んだように笑顔を見せていたけれど、清水係長が納品書を持って去ると、 ほっこりした空

誰にでもできる、 って訳じゃ……」

思わずそう言いかけたけれど、 笹森さんに鋭い視線を向けられて怖気づく。

い、い、言い出せない……怖いよ! おかーさーん!

どうやら仕事ぶりから、 私は格下に認定されたらしい。

となった人についても。 だと知っていますが、本社以外には知らない人もいますよね、 たことになりましたね……。披露宴には、本社の社員ほぼ全員を招待しましたから、皆さん私が妻 それにしても、 笹森さんにいつどうやって圭吾さんの妻の存在を知らせましょう……これは困っ そりゃ。 本当の苗字についても、

いやぁ……これは早く言った方がいいですよね? ―地獄の一丁目へご案内~、 ですよ! 今ですらこんなに恐ろしいのですから、

「笹森さんっ! あのねー

「あら、そろそろお客様が来る時間よ。 早く支度してね

-あっ、 あああ……」

「トロくさいわね。本当に袴田課長の補佐してるの? 今すぐ代わってあげてもい う よ し

ご、ごめんなさいっ」

....ん? なんで私、 謝ってるんだろう? おかしいな、 立場が逆転しているような気がします。

まとめ、椅子から立ち上がった。 私が口をパクパクさせている間に、笹森さんはプリントアウトした資料をテキパキとファイルに 打ち合わせが終わったら、 折を見て話そう。 私もバタバタと書類を抱えて後を付いていく。 う、うん、 いいよ

も要所要所で資料を出し、 「ユリちゃんやぁ、 ほんなら、ちーっとずつやらざぁ」 との打ち合わせにも同席した笹森さんは、 打ち合わせは、大体想像はできていましたが、まさに ちったぁ先輩見習ってまめったくな。 彼女のナイスアシストのおかげで、とても順調に話し合いが進んだ。 ちゃっかり圭吾さんの横に座り、 せーでもえらいようだったら……そうだ "笹森無双\* 控えめながら

ら源じぃんとこで、 「笹森さんは先輩じゃなくって、んーと、同期なようなもんです。 またお菓子よばれてもええ?」 ……そんならさ、 えらくなった

「えーよえーよ。嫁っこん在所からめんずらしいのが届いたからな。近くん来たら、ちょっくら寄 ちゃんと畏まった対応をしていたんだけど、 素<sup>†</sup> ぅ

話してくれ、 おじーちゃん達と同居しているので、身に沁みついているんです。 私と源じいで話が盛り上がる。 と言われて以来、 ついつい方言丸出しで話してしまうのです。 初めの頃は、 うちの実家は田舎だし、

呆然と私と源じいの様子を見ていた笹森さんが、 圭吾さんにコソコソと尋ねた。

「……課長……ええと、すみません、 よくわからなくて……」

と寄りな』、と言っているんですよ、 たらお菓子ご馳走になってもいいか』『嫁の実家から珍しいのが届いたから、 「『少しは先輩見習ってよく働きな。 笹森さん」 それでも大変だったら少しずつやればいい』、それと、 近くに来たらちょっ

まって、びっくりされますけど」 「すごぉい!」本社の辺りにもこんなに方言あるって知らなかったです。 私も気づかず喋ってし

「北海道の方言で?」

聞かれちゃいました」 「はい。タクシーに乗った時、 『ああこわい』 って呟いたら、 『俺、 怖いけ?』 って運転手さんから

「それはどういう意味なんだ?」

「疲れた、です。 ですから、私としては『あー疲れた』と言ったつもりなんですよ」

てどういうことさ! 元に手を当てて、クスクス笑う笹森さん。 そこ! ちゃっかり距離縮めてるんじゃなーーい!! そして、主吾さんの肩にさりげなく手を置いて……っ

笹森さんといったか。北海道の衆か?」

「ええそうです。 こちらで研修を受けるために北海道から来ました。 <u>ー</u>ケ 月間という 短 い 間です

ら学ぶことが多いでしょう」 「笹森さんはすでに他の支社でも経験を積んでおり、 大変優秀だと聞いております。 滝浪も彼女か

**圭吾さん! ていうか、ちょっと今、圭吾さんに寄って座り直したよね、** そういって圭吾さんは私達に微笑んだ一 -ちょっと、 笑顔サービスしすぎなんじゃないですか? 笹森さんんんい

――と、表面上は大変なごやかに打ち合わせは終わりました。

はうう.....

自宅に戻るなり、バッタリとソファに倒れこんだ。

気疲れです。精神的疲労です……私のライフはゼロよ!

と楽になりましたね。 今日も遅くなると言っていました。だから安心して、寝ころんだまま、 アスカートを穿いています。皺になりにくい素材なので、ゴロゴロしても大丈夫です。圭吾さんは ストッキングを脱ぎ、ゴソゴソと背中に手を伸ばしてブラジャーのホックをはずす。ふう……ちょっ 今日はシフォン素材のブラウスに、ピンクのニットカーディガンを羽織り、小花プリントのフレ いよっ! とお尻を上げて

だらしがないのは百も承知ですが、 今はちょっと動きたくありません。

ほんっとに疲れた……

葉はとんでもなく辛辣です。そんな恐ろしい相手に、実は……袴田課長の妻は私です! えますか? 言えませんよね。 笹森さんが演技派女優だったとは。見た目は守ってあげたいタイプの可愛い子なのに、 私への言

と意を決して告白するタイミングを見計らってはいたのですが、 なかなかチャン

へがなく、今日のところは断念しました。

でしたからね。渡辺センパイというワンクッションがあれば、少しはあの毒も薄まるでしょう。 圭吾さん狙い、 いやいや、でも明日は渡辺センパイが出社します。もともと笹森さんは渡辺センパイに付く予定 というのがハッキリとわかってしまい、内心穏やかではいられませんが、大丈夫

私達夫婦の絆は固いですので、ちょっとやそっとじゃ揺るぎませんよ?

ちゃっちゃらー♪

おっと、メールの着信が。寝転がったまま、 バッグの中のスマートフォンを取り出す。

圭吾さんからですね。……ええっ?

――新井田と笹森を夕食に連れていく。

すね……初日、ということで、きっと圭吾さんが連れ出したんだと思いますが。 そう思いたいですが。 ませちゃいましょ。 苦になりませんが、自分一人のためだと全くやる気が出ません。でもお腹は空いたので、簡単に済 ……ってことはあれか? 絆は固い、と安心しておりましたが、やはり敵もさるものです。この攻撃はぐっさりと刺さりま 今夜はご飯いらないってことですね。大好きな夫のために作る料理は

て冷蔵庫から取り出したわさび漬けに、ほんの少し醤油を垂らし、ご飯の上に載せたらできあが のそのそと起き上がり、 ……以上デス。 洗い物も少なく、とてもシンプルな夕飯となりました。 冷凍庫から一膳分の冷凍ご飯を取りだし、電子レンジに入れる。

洗い物を済ませ、風呂に入り、さあてなにをするか、ですよ。

## 立ち読みサンプルはここま

**圭吾さんは、まだ帰ってきません。きっとまた会社に戻ったんでしょうね。** サークルのサイトをちょっと弄りましょうか それじゃあってこと

以前と比べて半分……より少ない ノートパソコンを立ち上げてサイトを覗くと、ガクンとコメント数が減っていた。 訪問者の数も

リーダーは、偉大ですね……

今さらながらに、 リーダーのファンが多かったことを思い知る。

新リーダーにメールを打った。 ポチポチとコメントに返信をした後、 次回の同人誌即売に向けての申しこみの確認をするために、

いた時だけ更新するブログの方には、 次に自分のサイトを確認すると、こちらは固定の読者がいるので、 いつもの人からコメントが入っていた。 特に増減はなかった。

【シルミルク】 【パンダスメル】 課長のようなキャラを、 お仕事お疲れ様です! またお願いします! 冬の新刊は描き下ろしですか? (ハアハア) 待ってます

作の準備も始めなくては。 ああ、ありがたいですね。 こんな私の漫画でも、 待っていてくださる方がいるとは。 そろそろ新

前作シリーズは圭吾さんをオカズ……じゃなかった、 "二次元化禁止令\* が下っている今、 ちゃんと描けるかどうか……でも、 モデルにしていたからこそ三作も描けたの ま、 ボチボチ考

えましょうかね。

ようか、 とにかくさ、 女の子だけど、これを男の娘、と脳内変換すれば問題ありません。さあて、筋肉モリモリな彼にし ンロードし、圭吾さんのいない間に、ニタニタしながら遊びます! ノートパソコンの電源を落とし、スマートフォンを持ってソファに寝ころぶ。 クール眼鏡にしようか…… 萌えの補充ですよ。 今日は精神的に疲れましたからね……乙女ゲームのアプリをダウ うへへ……ゲームの主人公は うん、そうだよ、

体が揺れていることに気づき、 ゆっくりと意識が浮上した。

確かクール眼鏡と波打ち際を走り出すイベント中だったはずなんですが……

ひょっとして寝落ちしてましたか?

背中と膝の裏になにかがぐっと差しこまれ、ソファから浮いた……浮いたり

バチッと目を開くと、私を見下ろす圭吾さんと目が合った。

「ひゃつ……おか……えりなさい

うう、

自分で歩けますよぉぉ。

「こら。こんなところで寝ていると風邪ひくぞ」 たった今帰ったばかりな様子の圭吾さんは、 寝落ちした私を見て、 寝室へ運んでくれようとした